

実態に即した日本語表現の指導法

—共通教養科目「文章作法」・「発表法」の講義を通して—

裊 田 脩

1. はじめに

書店に出かけると、「文章の書き方」や「話し方」に関する書物が書架に数多く並んでいる。また、通信講座をはじめとする各種の講座にこれらが開設されている。この事象は、この種の本が売れるためであり、講座に参加する人が多いためであろう。また、時代が要求しているとも捉えることができる。逆に、「書き方」や「話し方」に対して、今ひとつ自信がない、このままでは自己を思うように生かせないという不安の表れとも言える。「書く」や「話す」の基礎は、小中学校をはじめ高校で学習してくるものである。しかし、その習得が十分でなかった、応用の効く学び方でなかったのかもしれない。

このような思いを抱きながら、北海道武蔵女子短期大学（教養学科・英文学科・経済学科）の教養学科12クラスの内4クラスで、科目「文章作法」と「発表法」の授業を担当している。本学生の大半は就職希望のため、本学が最終学校になる。これまでの学校教育における「書く」や「話す」を総括するとともに、自己表現力がより向上し豊かな人間性を育み、卒業後は社会人として生かすことができることを念頭に、学生の実態を踏まえた実践研究を報告する。

2. カリキュラムと「文書作法」・「発表法」

2.1 本学カリキュラムの改革

平成16年度より新しいカリキュラムが実施された。その目的は、一つに本学の「教育理想」である「知性・気品・意欲」の3点を見直し充実を図る、二つ目に国際化や情報化が進む時代の展望と変化に対応する、三つ目に本学生の大半は就職を希望している実態を踏まえ、社会人としての資質を育成することである。その一つとして、コミュニケーションの能力を高め豊かな人間性を育む目的で、「文章作法」と「発表法」が必修科目として新設された。前者は「論理的でわかりやすい文章が書ける」こと、後者は「パブリックスピーキングの能力を高める」ことがねらいである。

同時に、「基礎ゼミナール」（1年生対象、必修履修）では、前期に「基礎ゼミナールⅠ～レポート演習」（1単位）、後期に「基礎ゼミナールⅡ～発表演習」（1単位）と、指導の観点を明確にし、「文章作法」と「発表法」との連関を図ることになった。

2.2 「文章作法」と「発表法」の歩み

新カリキュラムによる平成16年度の「文章作法」と「発表法」は、1年生を対象に、それぞれ1単位で前期の必修科目であった。前期の授業時数14回の内、前半7時間（内1回目はオリエンテーション）が「文章作法」、後半7時間（内1回目はオリエンテーション）が「発表法」であった。このように設定した主因は、基礎ゼミナールとの関連にある。カリキュラム編成のねらいは、「文章作法」が前期の「基礎ゼミナールⅠ～レポート演習」、「発表法」が後期の「基礎ゼミナールⅡ～発表演習」への基礎作りにあった。

実際の授業は全学科400余名を、1クラス200余名編成で2クラスに分けて行われた。そのため、両科目とも一方的な伝達中心の講義であっ

た。「文章作法」では、最終回に作品を提出させ外注による添削であった。限られた時間内で約 400 名の作品を一人で添削するのは、物理的に不可能であるからだ。「発表法」では、学生 200 余名を 6 回の授業で発表させる時間的余裕が全く無かった。その上、人前で発表しようという意欲的な学生が現れず、元アナウンサーに依頼し見本を紹介するぐらいであった。

関連する基礎ゼミナールは全学科で 23 開設された。しかし、「文章作法」と「発表法」との連関に関する意思疎通やゼミナール担当者同士の足並みなど、指導体制の面で不十分なため、カリキュラム編成のねらい通りに効果を挙げるができなかった。

17 年度は、前年度の反省に基づき時間割編成面で改善を試みた。一つは前期に「文章作法」、後期に「発表法」を指導することにしたこと、二つ目は、指導者一人につき 200 余名を担当し、例えば教養学科の場合ではそれを 6 クラス（1 クラス約 36 名編成）に分け、毎週 3 クラスを隔週で授業するように工夫されたことである。少人数授業の始まりである。しかし、問題が依然として残された。「文章作法」で作品を提出させた場合、3 クラスを 1 週間以内で添削を終え、指導資料を作成しなければならない。他の公務もあり時間的に返却が不可能なため、夏季休業直前に提出をさせざるを得なかったことである。ただ前年と異なる点は指導者が添削を担当したため、学生の実態をより鮮明に把握することができ、前期講評授業では具体的に説明をすることができたことである。「発表法」では、授業効果の面から毎時間 6 名程度のスピーチのため、学生は 1 回の発表練習しかできなかった。いずれも個別指導が手薄にならざるを得なかったことである。

「文章作法」は「論理的でわかりやすい文章が書ける」、「発表法」は「パブリックスピーキングの能力を高める」がそれぞれのねらいである。これを達成するには、全体的な一斉指導とともに個に応じた指導があっ

始めて成り立つ。また、少人数授業の長所は全体と個の一体的指導を生かせるところにある。18年度に入ると、特色ある本学教育の一つとしてコミュニケーション能力の育成を前面に打ち出したことにより、「文章作法」と「発表法」担当の特任講師が採用され担当クラスが軽減された。また、1クラス約36名をA日程・B日程に分け隔週で行う時間割編成にしたため、「文章作法」では作品提出を少なくとも1回増やすこと、「発表法」では最低2回の発表練習が可能になるなど、従前より個別指導が可能になり現在に至っている。

3. 「文章作法」の実践

3.1 事前調査

「文章作法」や「発表法」のねらいを達成し、この指導を通して豊かな人間性を培うためには、個の実態を把握し、それが個の指導とともに全体的な一斉指導の場でも生かす必要がある。そのため平成17年度より、前年度の実態を踏まえ、追加・削除などの修正をしながらオリエンテーションの時間に「事前調査」を行っている。今年度は昨年度との比較から同じ調査項目で実施し、その結果を次に紹介する。なお、回答者数は59名で、()の数字は昨年度60名の回答である。

3.1.1 調査の結果

- (1) あなたは高校時代に「文章の書き方」を学びましたか。
- | | |
|---------|---------------|
| ア、学んだ | 28.8% (38.1%) |
| イ、学ばない | 32.2% (42.9%) |
| ウ、わからない | 39.0% (19.0%) |
- (2) (上記(1)のアを回答した人のみ) どの科目で学びましたか。
- | | |
|--------|---------|
| ア、現代文 | 7名 (6名) |
| イ、国語表現 | 6名 (7名) |

ウ、総合学習 1名(3名)

エ、放課後や長期休業中における特別授業 2名(0名)

オ、その他 1名(6名)

- (3) あなたは高校時代に読書や旅行などの感想文を書きましたか。
- ア、書いた 59.3% (60.3%)
イ、書かない 33.9% (33.3%)
ウ、わからない 6.8% (6.4%)
- (4) (上記(3)のアを回答した人のみ)書いた感想文の題名を思いつくまま記してください。〈割愛〉
- (5) あなたは高校時代に「感想文の書き方」を学びましたか。
- ア、学んだ 6.8% (9.5%)
イ、学ばない 62.7% (66.7%)
ウ、わからない 30.5% (23.8%)
- (6) あなたは高校時代に「意見文(小論文)」を書きましたか。
- ア、書いた 76.8% (68.2%)
イ、書かない 23.2% (31.8%)
- (7) あなたは高校時代に「意見文(小論文)の書き方」を学びましたか。
- ア、学んだ 57.6% (61.9%)
イ、学ばない 22.0% (31.8%)
ウ、わからない 20.4% (6.3%)
- (8) あなたは高校時代に「レポートの書き方」を学びましたか。
- ア、学んだ 0% (3.2%)
イ、学ばない 88.1% (92.0%)
ウ、わからない 11.9% (4.8%)
- (9) あなたは高校時代に文章を書いて提出したとき、どのような方法で指導されましたか(複数回答可)。
- ア、個別に口頭で 22名(26名)

- イ、集団の場で口頭により 7名 (10名)
- ウ、個人添削で 34名 (48名)
- エ、提出したが指導されなかった 9名 (4名)
- オ、提出をしたことが無い 2名 (2名)
- カ、その他 1名 (0名)

(10) あなたは高校時代に「適切な表記のありかた」について学びましたか。

- ア、学んだ 18.6% (19.1%)
- イ、学ばない 49.2% (47.6%)
- ウ、わからない 32.2% (33.3%)

(11) あなたは高校時代に「構想の練り方や構成のあり方」について学びましたか。

- ア、学んだ 37.3% (20.6%)
- イ、学ばない 40.7% (55.6%)
- ウ、わからない 22.0% (23.8%)

(12) あなたは高校時代に「主題の決め方」について学びましたか。

- ア、学んだ 8.5% (3.2%)
- イ、学ばない 72.9% (82.5%)
- ウ、わからない 18.6% (14.3%)

(13) あなたは高校時代に「タイトルのつけかた」について学びましたか。

- ア、学んだ 1.7% (7.9%)
- イ、学ばない 81.4% (82.6%)
- ウ、わからない 16.9% (9.5%)

(14) 文章を書く上で、わからないことや克服したい事柄を具体的に記してください。

この質問は記述式の回答のため、ここでは上位5点のみ紹介する。

- ①書く順序の決め方 21名

- ②文章全体のまとめ方 19名
- ③わかりやすい言い回し方 11名
- ④始めや終わりの書き方 11名
- ⑤段落の設け方 9名

3.1.2 調査の解説と総括

「事前調査」における質問事項設定の背景と、調査結果から指導すべき観点や内容を明らかにするための総括を次に述べる。

- (ア) 質問のすべては「高校時代」と限定した。小学校や中学校でも文章の書き方について学習してくるが、高校3年間であれば記憶もある程度定かであるためである。その上、高校の学習状況がわかると、本学における指導にも生かせると考えたからである。
- (イ) 文章といっても手紙文・感想文や報告文と、目的によって多様である。その意味では、質問(1)「高校時代に『文章の書き方』を学びましたか」は漠然とした問いである。どの種の文章でも良い、「書き方」を学んだかを感覚的に把握する意図から設けた。実際は、「わからない」を含めると「学ばない」が昨年より約10%多く、71.2%である。高校の国語には、科目「国語表現」が設けられているように、表現力の育成が言われて久しいのに、意外な数値である。
- (ウ) 質問(2)「どの科目で学びましたか」は、質問(1)を確認することと、高校のカリキュラム上の学習状況を把握するために設けた。調査の結果では、高校の正規のカリキュラムで学んできた学生は14名の23.8%に過ぎない。昨年は16名で26.7%であった。このことから、本学生の大半は、高校時代に一斉指導のもとで、基礎基本を踏まえ系統的な「文章の書き方」を学んでこなかったと推察される。
- (エ) 質問(3)・(4)・(5)は感想文に関するものである。多くの高校では落ち着いて学習する習慣、および豊かな感性や思考力を養うために、

読書時間の設定や、長期休業中の課題として感想文を課しているという。また見学旅行や学校祭などの学校行事の折にも課していると耳にする。そうであるならば、感想文の書き方を基底に意見文の書き方へ発展させることができるという考えにより設定した。実際は、質問(3)の「感想文を書いた」は昨年と同じように約60%に対して、質問(5)の「感想文の書き方を学ばない」が62.7%で、「学んだ」は10%未満である。「文章作法」のねらいである「論理的」を生かすには、意見文が最も効果的であるため、この結果から意見文の書き方は基礎から指導する必要があると判断せざるを得ない。その上、質問(14)の回答に、「感想文と小論文の違い」や「感想文の書き方がわからない」などが寄せられているので、意見文指導の中で感想文の書き方にも触れることにした。

なお、質問(4)の回答は割愛したが、「見学旅行」をトップに「読書」・「高校時代の思い出」と続いた。

(オ) 質問(6)・(7)は「意見文(小論文)」に関する項目である。「書いた」は昨年より増え76.8%に対して、「書き方を学んだ」は昨年よりやや減少し57.6%であった。この数値から、「書いた」と「書き方を学ばない」との間に約20%の差異があることと、質問(1)の回答「学んだ」の28.8%と大きく矛盾することである。前者については、必要性が求められ「独力で書いた」学生をはじめ、質問(9)の回答「提出をしたが指導されなかった」9名や「個別に口頭で」22名の一部が含まれていると捉えることができる。後者については新たに項(シ)を設け述べる。

(カ) 質問(8)「レポートの書き方」は、基礎ゼミナールをはじめ2年次の「課題研究」、「他の科目」との関係から設けたものである。「レポート」の意味範囲は広いが、「学んだ」が0%であることは、高校時代に図書館やインターネットなどを利用しての「調べ学習」が不十分

であったといわざるを得ない。題材の調べ方と合わせて、レポートの書き方にも触れる必要がある。

(キ) 質問(9)は、高校時代にどのような指導をされてきたかを尋ねたものである。複数回答であるが、集団の場、つまり一斉指導の場で「学んだ」は7名の11.9%に対して、個人添削が34名で57.6%に当たる。これは質問(7)の「意見文の書き方を学んだ」と同じ数値であることから、「学んだ」の大半は「個人添削」によるものと捉えることができる。表現の仕方や文章力は十人十色である。そのため個々に応じた指導が求められ、個人添削が主流にならざるを得ない。しかし、この指導は文章全体から見ると部分的な指導に陥りやすく、系統的な書き方の指導が手薄になる嫌いがある。個に応じた指導と系統的な指導との一体化が必要になる。

(ク) 質問(10)から(13)については、高校時代における「書き方」の指導内容を尋ねたものである。同時に、科目「文章作法」における指導の重点を把握するためでもある。「書き方」の指導で最も容易なのは「適切な表記」に関することである。文章の形式面に相当し、一定のルールがあるからである。しかし、実態は昨年と同じように「学ばない」は「わからない」を含めると80%を超える。表記に関する基礎知識が不十分ではないかと推察される。

(ケ) 文章を書く上で要となる質問(11)「構想の練り方や構成のありかた」については、「学んだ」が昨年より増えているが、約3分の2は「学ばない」・「わからない」である。質問(9)「高校時代の指導内容」では、個人添削が60%近くを占めているのと比べると、何を「学んだ」のか、疑問を抱かざるを得ない。

(コ) 質問(12)「主題の決め方」や質問(13)「タイトルのつけかた」の回答結果は例年と同じであろうと予測され、指導事項として再確認するために尋ねたものである。高校では、例えば「ゴミ問題」・「公共機

関におけるマナー」というように、「何を書くか」明らかなテーマを提出し、これに基づいて文章を書かせているのが多いからである。しかし、これは受身的な学習の仕方である。社会人としての資質や豊かな人間性を養う上で、「何を書くか」自らテーマを考え書く態度が求められる。そのため、課題設定にはこの点の配慮が必要になる。

(㊦) 最後の質問(14)は、一つは「個別指導」の資料として、他の一つは、この回答を集約して一斉指導の重点を確認するために設けたものである。

(㊧) 上述の(㊦)で保留にしていたことを次に述べる。結論を先に述べるならば、質問(7)「意見文(小論文)の書き方」を「学んだ」の57.6%より、質問(1)「文章の書き方」を「学んだ」28.8%の結果がより正確であるとみなすことができる。それは、質問(2)の回答から言えるように高校の正規のカリキュラムで指導を受けてきた学生は、59名中14名の23.7%であることと、質問(9)「どのような方法で指導されたか」では「集団の場」が7名に過ぎないからである。それではどうして質問(1)より質問(7)の「学んだ」が多いのか、その主因は本学の入試制度にある。本学の入学試験は、指定校推薦試験と学力試験(センター試験による選抜も含む)の2種がある。前者の場合は面接試験と800字以内の作文試験から成っている。このため、推薦試験の受験者の多くは、受験対策として事前に「書く」練習をし、個人添削を中心に指導を受けてきたことにある。担当している4クラス59名の内、推薦による入学者は37名で62.7%も占めているからである。さらに、掲載は省略したが、質問(9)のア・イ・ウでは、指導を受けた回数も記述することになっている。個人添削で最も多かったのは3回であった。このようなことから、質問(7)「意見文(小論文)の書き方」を「学んだ」内容は、個人添削中心で、部分的・即効的な指導によるものと推察することができる。そのため、質問(1)

は基礎基本を踏まえ系統的な書き方による学習の有無、質問(7)は受験対策中心による即応的・即効的学習の有無に立って回答したという見方もでき、両者に乖離が生じたと考えられる。

以上の調査結果から、個別指導を合わせて意見文(小論文)の「書き方」を基礎から系統的に指導する必要がある。それは、①調査の質問(14)の回答から、どの学生も文章を書く上で解決しなければならない課題を所有している、②高校時代に書き方を「学んだ」学生は、その知識を習得しているとは必ずしも言えない。反復することによって、既習知識を再確認し、習熟度を高めることができる、③「学んだ」・「学ばない」に関係なく、系統的な視点に立った文章の書き方を指導することにより、断片的な知識が体系化され文章力の向上が早まるからである。つまり「急がば回れ」の指導が実態に即したものであると考えるに至った。

3.2 指導の重点

「文章作法」のねらいである「論理的でわかりやすい文章を書く」を達成するため、「事前調査」とこれまでにおける本学生の文章力の実態を踏まえ、指導の重点を次のように定めた。

- (1) 主体的に学習する態度の育成
- (2) 全体的な指導と個に応じた指導との一体化
- (3) 主題の決め方とそれに基づく構想の練りかた
- (4) 論理的な思考とそれに基づいた構成のありかた
- (5) 読み手の立場に立つわかりやすい表現のしかた
- (6) 文章を書く上での社会的なルールの習得
- (7) 様々な文種と書きかた

3.3 指導の計画

指導の重点を踏まえ、指導計画を次のように立てた。ここでは概観にとどめ、詳細は以下の3.3.0～3.3.8で述べる。

※	オリエンテーション
1	意見文を書く①
2	表記の学習
3	主題と構想の学習
4	構成の学習
5	表現の学習
6	推敲の学習
7	意見文を書く②
8	前期講評授業

3.3.0 オリエンテーション

この時間は学生との初顔合わせの場である。自己紹介後に「事前調査」を実施し、回収後にその活用について説明をする。その後、『学生便覧』（シラバス）を用いて「文章作法」のねらい、授業計画、評価の方法について説明をし、次回の授業「意見文を書く①」の課題を提示する。そのための下書き用の原稿用紙を配付し、辞書の持参を添える。

3.3.1 意見文を書く①

最初の授業に文章を書かせる目的は、本年度入学者の文章力を把握し、先の「指導の重点」および「指導の計画」の適否を確認するためである。与えた課題は「日常の生活において最も関心のある事柄を取り上げ、あなたの考えを1,000字以内で述べよ。」である。その設定は次による。

- (1) 「日常の生活」としたのは、身近なことに対する問題意識の涵養にある。

- (2) 「最も関心のある事柄」としたのは、「何を書くか」書く主題を主体的に決める態度を養うためである。例えば、昨年の12月に行われた本学の指定校推薦入学試験（英文学科）の問題は、「日本では従業員に英語の習得を推奨・推進している企業が多くなってきています。なかには、英語を『社内公用語』として、会議・文書作成、従業員の会話をすべて英語で行うことにした企業がいくつか出てきています。こうした動きに対する、あなたの考えを自由に述べてください。」であった。この問題のように、高校時代までは「何を書くか」が明白な課題のもとで学習してきたのが大半である。そこから一歩進め、自ら「何を書くか」問題意識を高め「書く」意欲を育てるために設けた。
- (3) 「あなたの考え」としたのは、①文章作法のねらいである「論理的」な文章を書く力をつけること、②本学生の大半は就職を希望していることから社会人としての資質を養うこと、③男女平等、国際化や情報化の社会にあって主体的に生きる意識や態度が求められているためである。共通して言えることは、物事を論理的に考え自己表現力を養うことに主眼を置いている。
- (4) 「1,000字以内」としたのは、高校時代までは600～800字で文章を書くことが多いと聞いていたが、与えた課題や2年次に必修である「課題研究」への対応から分量を増やした。

限られた授業回数のため、「意見文を書く①」は家庭学習に回すという考えもある。しかし、授業時間内に清書させたところ、学生は文章の削除、辞書による確認や丁寧に書き上げるなど、より良い文章へ推敲する態度が見られた。なお、提出の早い学生で60分、4割の学生は90分を要した。

3.3.2 表記の学習

作品「意見文を書く①」を返却する。添削は2部構成である。表現や表記関係は左右の空欄に、主題や構成関係は下欄の空欄に記す。特に後者については「事前調査」の質問(11)の回答を踏まえ助言する。大半の作品は論拠が薄弱、感覚的・印象的な内容、誤った表現など、文章を書く上での基礎基本が不十分であった。高校時代の復習を兼ねながら基礎基本の定着を図ることが早期に文章力の向上に直結するため、改めて「指導の重点」および「指導の計画」を再確認する。

文章指導に立つと、「表記の学習」は一般的には終わりに位置するであろう。これを始めに持ってきたのは次の理由による。

- (1) 全員必修の「基礎ゼミナール」との関係にある。このゼミナールでは前期が「レポート演習」となっており、全学的に表記上の共通を図るためである。
- (2) 「事前調査」質問(10)「高校時代に適切な表記のありかた」の結果による。「学ばない」が「わからない」を含めると80%を超えていたためである。
- (3) 「意見文を書く①」でも、表記や原稿用紙の使い方で誤りのない作品は若干名に過ぎなかったからである。その意味では「事前調査」の回答は信憑性が高いといえる。

今年度の授業では、《資料1》(平成16年度『北海道新聞』掲載記事を練習用に改変)を用いる。誤りを半数以上発見した学生は、どのクラスも2割程度であった。そのため、この教材を中心に「表記上の注意点」や「正しい原稿用紙の使いかた」をまとめる。中でも「意見文を書く①」では、読点の働きを理解していない学生が顕著であったため、練習問題を提示し習得を図る。

《資料1》

(「文章作法」教材1)

[1] 表記の学習 (原稿用紙の使い方も含む)

1 「表記」及び「原稿用紙の使い方」の誤りを直しなさい。

3																			
6																			
9																			
12																			
15																			
18																			

3.3.3 主題と構想の学習

はじめに文章を書く一般的な作業の流れを明示する。①何を書くか、主題を決める→②それをどのように書くか、構想を練り構成を考える→③これが決まったならば、一気に終わりまで下書きをする→④書き終えた後、推敲する→⑤清書することである。

本授業は上記の①と②の構想の練り方まで取り上げる。①の主題の決め方はいろいろあるが、ここでは「意見文を書く①」の課題を取り上げ一般的な方法を紹介する。同時に、「意見文を書く②」の課題を提示し、この方法を習熟させる。その課題は「社会の風潮や出来事で最も関心のある事柄を取り上げ、あなたの考えを1,000字以内で述べよ。」である。作業の流れは以下である。

- (1) 「意見文を書く①」の課題である「日常生活」で「最も関心のある事柄」を列挙させる。ブレーンストーミングの手法である。
- (2) 同じように「意見文を書く②」の課題である「社会の風潮や出来事で最も関心のある事柄」を列挙させる。
- (3) その中から、(a)与えられた課題と直結しているか、(b)よく知っている事柄か、(c)これに対する自分の考えがあるか、(d)資料が集めやすいか、(e)与えられた字数内で収まるか、これらの観点から「何を書くか」を絞る。この作業は、自らの考えに基づき選択する能力が高まることになる。
- (4) 「何を書くか」が決まれば、「何が最も書きたい(言いたい)のか」一文で書かせる(授業では主題文と呼ぶ)。「意見文を書く①」では、見本として「私は部活動をしているときに最も充実している。」をはじめ数例挙げ、次いで「意見文を書く②」の主題文を書かせる。その折、机間を巡回し助言も行う。主題文を書かせるのは、「事前調査」質問(4)の中に「書きたいことがまとまらない」、「書いているうちに内容がテーマからずれる」、「何を書いているのかわからなくなる」、

「話が飛躍する」という回答に対する解決策のためである。

次に構想の練り方に入る。

- (5) 上記(4)「私は部活動をしているときに最も充実している。」を用いて、構想の練り方の一方法を指導する。この主題文をいかすためには、どのようなことを書かねばならないか、指名により列挙する。
- (6) 学生からは、「所属する部活は何か」、「加入の動機や目的はなんだったのか」、「どのようなときに充実感があったのか」、「授業やアルバイトよりどうして充実なのか」、「この充実感が他に影響を与えたか」などが提起された。これと同じように、「意見文を書く②」の主題文でも同じ作業をさせる。

なお、本日使用した教材や記録したノートは、次回で活用するので必ず持参するよう指示する。

3.3.4 構成の学習

「意見文を書く①」の構成の仕方が軟弱、および「事前調査」質問(14)では、「書く順序」、「始めや終わりの書き方」、「段落の設け方」や「文章全体のまとめ方」が「わからない」が60名にも及ぶので、時間をかけて指導をすることにした。実際の授業展開は以下である。

- (1) 《資料2》(『ピアで学ぶ大学生の日本語表現』64ページ『7-4書く：いろいろなパラグラフを知る』を引用)を配付し、構成の基本を指導する。文章は「はじめ」・「なか」・「おわり」の3段構成が基本であることを確認する。
- (2) 意見文の「はじめ」は、主題・結論、動機・目的、問題の提起、定義・解説などが一般的に位置する。「なか」は「はじめ」の説明であり、その仕方は《資料2》で学習したように、比較対照、分類、因果、時系列、具体例などがある。「おわり」はまとめに当り、結論や残された課題などを述べることを周知させる。

《資料 2》

(「文章作法」教材 6-1)

論理的な構成の基本例

- 1 アメリカのプロ野球は、メジャー・リーグとマイナー・リーグから成り立っている。最上位のリーグであるメジャー・リーグは、ナショナル・リーグとアメリカン・リーグに分かれている。両リーグの間に序列はない。ナショナル・リーグは 1876 年に 8 球団で発足し、現在は 14 球団になった。アメリカン・リーグは 1900 年に 7 球団で発足し、現在は 16 球団から構成されている。両リーグとも、球団数の増加に伴い、それぞれ東部、中部、西部の 3 ブロック制を採用している。マイナー・リーグは、メジャー・リーグの各球団系列下のチームで、3 A、2 A、A、ルーキー・リーグの 4 つの階層から成っている。マイナー・リーグから順番にメジャーに上がっていく選手もいる一方で、メジャーからマイナーに落ちる選手やその両方を行ったり来たりする選手も多い。
- 2 今日のバイオテクノロジーの原点ともいえる発酵食品は、洋の東西を問わず古くから人間に親しまれてきた食べ物であり、健康の増進にも役立っている。西洋ではチーズ、ヨーグルト、ワイン、パン等が、東洋、特に日本では、醤油、味噌、漬物、日本酒等が何世紀にもわたって人々の日常の食生活を支えてきた。諸国では、完全栄養品である牛乳から多くの発酵食品が生まれている。その 1 つであるヨーグルトは、カルシウムや鉄分の消化吸収を助け、腸の働きを活発にし、老化防止、免疫力の向上にも役立つ。一方、日本では、良質のたんぱく質、カルシウム、ビタミン B 1、食物繊維を豊富に含む大豆から多くの発酵食品が作られている。なかでも味噌は、ガン予防、胃潰瘍の防止、コレステロールの抑制、消化促進作用、老化防止、整腸作用等の働きがあるといわれている。このように、多くの長所を持つ発酵食品は、長く世界の人々の健康を支え続けてきている。
- 3 日本の浮世絵は、フランス印象派美術に大きな影響を与えた。19 世紀後半、

ヨーロッパでは、日本の漆器、陶磁器等の伝統工芸品や浮世絵が、「ジャポニズム」として人気を集め、ブームとなった。そのなかで、特に浮世絵は、当時のヨーロッパ絵画の伝統技法に飽き足らず、試行錯誤していた若い「前衛」画家たちの心をとらえた。ヨーロッパの伝統絵画の主流は、戦争画、宗教画や貴族の肖像画だったので、庶民の日常をのびのびと描いた浮世絵の画風、明るい色は、衝撃的な感動を与えた。また、主題を切断したり、一部分を描いて全体を暗示するという浮世絵の手法は、絵画の1つの完結した世界を描き出す伝統的な西欧絵画を見慣れた目には斬新だった。そこで、マネ、ロートレック、ゴッホ、ドガ等、後世の代表的な印象派の画家たちは、競って日本の浮世絵からさまざまな技法や画風を取り入れていった。ゴッホ等は、実際に浮世絵を模写した作品も残している。このように、浮世絵は単なる異国趣味を超え、西欧の絵画表現そのものに大きな影響を与え、「印象派」という新しい絵画の誕生に貢献したのである。

- 4 世界の年中行事には、使用する暦によって、日にちが固定のものと毎年変わるものがある。中国や、東南アジアの中国系の人々は旧正月を盛大に祝うが、これは太陰太陽暦に従うため、毎年日にちが変わる。インドのヒンズー教徒のディーパバリ、イスラム諸国のイドル、フィトリ、ユダヤ教徒のローシュ・ハシャナ等も大切な年中行事だが、太陰暦に従っているため、日にちは固定されていない。多民族国家のアメリカでは、感謝祭が国民の祝日として毎年11月の第4木曜日に定められ、この日ばかりは国を挙げて祝う。日本で最も重要な年中行事である正月は、明治以来、毎年1月1日と決まっており、大晦日の除夜の鐘や初詣等、宗教色が色濃く残る習慣が大切にされている。日にちの決め方はさまざまだが、このような年中行事にはそれぞれの伝統が綿々と受け継がれている。

なお、「なか」における各種の説明の仕方は、物事を考えるときや、認識する上での基本事項であることも添える。

(3) 以上が構成の基礎知識であることを踏まえ、構成を考える実践的作業に入る。〔7〕「主題と構想の学習」の(4)で触れた「私は部活動をしているときに最も充実している。」と、(6)の学生の提起を活用した。矢印の左側は指導者の発問、左側は学生の答えである。

① 「はじめ」にどんなことを書きますか。→日常生活における主な事柄（授業、アルバイト、部活動、読書等）を紹介し、主題文に入る。

② 「なか」ではどんなことを書くと効果的ですか。→どんなときに充実したと思えるのか、その状況を述べる。それが授業（またはアルバイト）よりどうして充実感があるのか、その理由を述べる。

③ 「おわり」はどんなことを書いてまとめますか。→結論（主題文）を書き、部活動への抱負または充実感が授業やアルバイトへの刺激になっていることを述べる。

(4) 構成とは、構想を練った事柄を筋道の整うように配列することである。上記であるならば、「はじめ」が第1段、「なか」は「充実感の場面」が第2段、次いで「理由説明」が第3段、「おわり」が第4段となり、段落設定が完了する。なお、1,000字程度の文章であるならば、「なか」は多くて3点（段）、一般的には2点（段）になることも付す。

(5) 前授業（〔7〕「主題と構想の学習」）で行った(6)「意見文を書く②」主題文の続きに入る。主題文を生かす事柄の取捨選択をさせ、次いで「はじめ」・「なか」・「おわり」の配列を考えさせる。それが決まったならば、一気に下書きをするよう原稿用紙を配付し家庭学習として課す。

《資料 3》

(「文章作法」教材 7-1)

〔5〕 表現の学習

1 《 》

- (1) 私はグランドスタッフになることが夢である。
- (2) 私はベストセラーになっている本を読んだが、何の魅力も無い本だ。

2 《 》

- (1) 石狩地方と後志地方の一部に豪雪があった。
- (2) 私は最初にテレビや新聞などで原発の話題が上げられるたびに「原発なんて無くてもいい」と思っていました。

3 《 》

- (1) 私はいまだ一度も聞いたことがある。
- (2) 私は武蔵に入学してからは予習をして授業に臨んでいるので、成績は多分伸びる。

4 《 》

- (1) 後期の授業が始まった。そして欠席しない記録をつくろうと私の努力も始まった。しかし、それは苦しいことだった。いまさらやめることができなかった。

5 《 》

- (1) 私は高校時代にサッカーのマネージャーを2年半やりました。今、グラウンドを見ると懐かしい気がする。とても忙しかった思いが浮かびます。

6 《 》

- (1) 今現在も、震災前とは天と地の差がある生活をしている者がいる。
- (2) 長いように思ったが、その時間は約10分ぐらいだったろう。
- (3) マナーの問題の中でも特に気になっているのは、電車でのマナーの問題です。

3.3.5 表現の学習

過去の本学生および今年度の「意見文を書く①」の作品を素材に、表現上における誤りの基礎的な文例問題を作成し、教材として配付(《資料3》参照)する。その内容は、①主語と述語が不照応、②修飾と被修飾の関係が不明瞭、③副詞の呼応関係が誤用、④接続語の誤用、⑤文末表現の不統一、⑥同語(同意)的表現の反復、⑦時制の不一致、⑧一文内における格助詞「の」および接続助詞「が」の多用、⑨冗長な文章、⑩事実と意見の混同などである。作品を読むと表現の不適切が目立つ。言い回しは個々の学生の特性を尊重しながら、簡潔明瞭な表現を基本に助言する。

3.3.6 推敲の学習

「構成の学習」の(5)で課した下書きに戻る。書き終えた文章は荒削りのため、推敲の作業に入る必要があるからだ。その観点は、①主題は明確か、②構成は論理的か、③表現は明瞭か、④表記や原稿用紙の使い方は適切かである。具体的には今年度入学生の作品である《資料4》と《資料5》を教材として配付する。前者は上記の①・②・④を、後者は③を中心に推敲の作業を行う。この作業は、これまでの各学習の定着を図ることと、推敲の態度を養うためである。

《資料4》では、④の表記や原稿用紙の使い方の面で、学生は積極的に応じた。しかし、①の主題や②の構成面では、学生自身が半信半疑のためか、指摘は皆無に等しいものであった。そのため問答形式で推敲することにし、矢印の左側は発問、右側は学生の答えである。

- (1) 主題は何でしょう。一文でまとめてください。→私が東日本大震災で感じたのは、穏やかな日常であつても感謝の気持ちを忘れず、家族や友人を大切にすることである。
- (2) 主題文を生かすには、どんなことを述べる必要がありますか。→

《資料4》

題	東日本大震災で私が感じたこと	教養学科〔4A〕クラス	学生番号 氏名	O・S
1	3月11日に起きた痛ましい自然災害を私は今も尚、鮮			
3	明に覚えていきます。当時私は高校の情報授業中で、古			
5	い校舎だった為、かなりの揺れを感じました。たまた			
7	ところマグニチュード7という数字にアケセ淡路			
9	大震災が浮かび、クラスメイトと不安がっていました。ま			200
11	7家路につき、テレビをつけて見ると、津波の影響で無残			
13	にただぶかぶかと浮いている瓦礫や自動車がまるでおも			
15	ちゃんのように見えました。私はこれは現実？夢？と何度が			
17	11も自分になりその夜は眠れませんでした。			
19	翌朝からは度々なる余震、時間が経過するとに増えて			
21	いく亡くなった方の人数、テレビも24時間震災関連で、			
23	鳴り響く緊急地震速報に、落ち着かない不安な日々が続			400
25	ましました。そして、時間の流れとともに、被災者の悲痛			
27	17声や身内全員が津波に乗まれ、「みんな死んでしまった			
29	、被災者は一人ぼっちと泣き叫んでいたり女性のように、			
31	19落ち度もない人達にどうしてこのように惨いことが起			
33	21てしまったのか、自然を前にした人間の無力さに考え			
35	せられました。			
37	23この震災で日本人は多くのことを学んだと思います。私			600
39	は、今ある生活は当たり前だと思っただけはいけない、与			
41	25られた命を大切に生き、自分の家族や友人を大切に			
43	いこうという気にさせられました。そして、震災から一			
45	27年後の今年の3月11日の特別番組を見て、家族、身内を			
47	失った被災者が前を見つめ、自分のこの故郷をどうにか			
49	29して復興させようとする姿を見て、心を打たれました。			
51	また、被災地に直接赴き支援を行うボランティアの人々			
53	31の姿を見て、私も身近かな所から、武蔵のボランティア			
55	活動に興味を持つことができました。			800
57	33最後に、3月11日に起きた震災を私からは絶対に風化さ			
59	せてはいけません。普段から地震に備える準備			
61	35や、地域のコミュニケーションが希薄にならないよう努			
63	めなければいけないと思いました。今あるごく普通の生			
65	37活がどれだけ幸せであるか気づかれました。この普通			
67	で穏やかな日常であつても、常に感謝の気持ち忘れず			
69	39、家族、友人を大切にしてくれからの毎日を無駄なく何			
71	事も一生懸命に取り組む生活していこうと思			

(a) そのように感じた「きっかけ」、(b)「感じる」前まで、家族や友人に対してどのように思いで対応していたのか、(c)「感じた」ことを今の生活にどう生かしているのか、またはどう生かそうとしているのかである。

(3) 本文を「はじめ」・「なか」・「おわり」に分けてください。→「はじめ」は22行目まで、「なか」は32行目までで、残りが「おわり」である。

(4) 構成面で問題がありますか。→「はじめ」が原稿用紙の半分以上を占め、「なか」が短く説明不足である。

(5) 書き方はいろいろあると思いますが、あなたの場合どのように配列しますか。→「はじめ」は「3月11日に東日本大震災が発生し、亡くなった人や行方不明が多数に上った」事実を述べ、主題文に入る。「なか」は17行目の「女性の悲痛」を生かし、その「きっかけ」を書く。続いて、震災前までの家族や友人に対する思いや対応を具体的に述べる。「おわり」では、主題文を述べ、続いて例えば31行目の「武蔵のボランティア活動」で生かしていることを書く。

《資料4》で主題と構成面に焦点化したのは、「事前調査」質問(14)の「書く順序の決め方」・「文章全体のまとめ方」や「始めや終わりの書き方」などの回答を踏まえたものである。

《資料5》は「事前調査」質問(14)の「わかりやすい表現」や「意見文を書く①」の実態から、「表現」に的を絞り推敲の作業に取り組む。ここでは学生から疑問の出た表現箇所を3点挙げ、他は省略する。

① 2行目の「なぜなら趣味をやっているときが一番楽しい時間だからです。」は、同語的表現の重複のため「なぜなら趣味をやっているときが一番楽しいからです。」、②13行目の「私の趣味は音楽です。中学の時からギターを弾いています。」は、次の14行目の接続との関係から「私の趣味は中学から続いているギター演奏で

《資料 5》

題	興味について	教養学科〔4B〕クラス	学生番号 氏名	R・F
1	私が日常で最も興味があることは「趣味」です。なぜなら趣味をやっているときが一番楽しい時間だからです。			
3	私は、一日のうちにはバイト、宿題をしなければいけないことが沢山あります。学校や、仕事だけをしている人生はつまらない。			
5	しかし、勉強や仕事だけをしている人生はつまらない。のだからと思います。好きなくれと打ち込める時間は、一日			
7	を充実したものにしてくれたいです。楽しいむこると疲れを忘			200
9	られた、明日も頑張ろうという気持ちになれからです。			
9	また、趣味は楽しむだけでなく、自分の物事を見る視野			
11	や自分の可能性を広げることができ、多くのことを学ぶ			
11	び自分で磨くことができています。趣味を始めて多くのことを学			
13	私の趣味は音楽です。中学の時からギターを弾いてい			
15	ます。音楽を聴くのも楽しいですが、演奏するのはもつ			
15	と楽しいです。ギターは毎日続けていれば、必ず上手く			
17	なります。しかしいつまでも同じ曲や同じようなレ			400
17	の曲ばかり弾いていても、それ以上上手くなることはあ			
19	りません。今このレベルで十分だと思っていると、下手があ			
19	らなっていくこともあり、楽しくなくなっていくことがあ			
21	ります。私は、毎日少しでもいいから上手くなる練習を			
21	して、上を目指して毎日コツコツ努力することが楽しく			
23	頑張れるコツだとギターから学ぶことができました。			
23	このことを意識しだしてから、勉強へ取り組む姿勢が			
25	変わりました。以前はテストさえなんとかなればいいと			600
25	思い、あまり勉強はしませんでした。しかし、高みを目			
27	指す姿勢を身につけ、毎日少しでも勉強することが			
27	が楽しくなり、学力を上げることができました。私は趣			
29	味を通して努力することが楽しさの一つだということ			
29	を学ぶことができました。			
31	私は音楽のほかにもいろいろな趣味があります。興味			
31	を持ったものには、挑戦するようになっていきます。新しい			
33	世界を知り、学ぶことは楽しくこれからいろいろなこ			800
33	とに挑戦していきたいと思えます。			
35	しかしやらないべきことをやらないでいると後々自分が苦			
35	しくなります。後悔ばかりすることも辛いですが、なに			
37	より好きなことかです。これからはやらないでやらなかつた責められ			
37	がとて辛いかです。これからはやらないでやらなかつた責められ			
39	た上で、趣味を思い切り楽しむことで充実した毎日を送			
39	りたいと思います。			

す。」、③ 30 行目の「興味を持ったものには、挑戦するようにしています。新しい世界を知り、学ぶことは楽しくこれからもいろいろなことに挑戦していきたいと思います。」は、同語的表現の重複回避と理由の説明を明らかにし文意明瞭にするため「興味を持ったものには、挑戦するようにしています。それによって、新しい世界を知り、学ぶことができ楽しいからです。」に、それぞれ修正する。

以上の推敲作業で学んだことを基礎に、一気に書き終えた「意見文を書く②」の下書きを次回までに推敲するよう指示する。

3.3.7 「意見文を書く②」

提示した課題は先に記したが、「社会の風潮や出来事で最も関心のある事柄を取り上げ、あなたの考えを1,000字以内で述べよ。」である。「意見文を書く①」の「日常の生活」から、「社会の生活」へ視点を変えたものである。社会人としての資質を養うとともに、来年から始まる就職活動を側面的に支援するためである。その他の設定理由は「意見文を書く①」と同じであるため、ここでは割愛する。清書するのに早い学生で40分、約4割の学生は90分を要した。

3.3.8 前期講評授業

添削を施した「意見文を書く②」を返却する。添削の記載要領は前回と同じであるが、下段の主題・構成をはじめ文章全体に関することは、前回の作品を踏まえた。この授業は2クラス合同で、「発表法」のオリエンテーションを兼ねているため、講評は次の事柄に留めた。

- (1) 「何を書くか」主題の明確な作品が多数であったが、例えば解決策が欠落、または抽象的に終わっていたのがある。
- (2) 構成面は論理的な作品が前回より増えたが、例えば「はじめ」に

「原発反対」と述べながら、「おわり」になると「賛否どちらともいえない」と、論理の矛盾したものがあつた。

- (3) 表現上の問題は、約 90%の作品に散見された。事実と意見の混同、同語（意）的表現の繰り返しが特に目に付いた。「表現の学習」で用いた教材の復習を促すとともに、今後の指導課題である。
- (4) 表記や原稿用紙の誤りは、前回より激減した。添削では、例えば「誤字です」としか明示していないので、各自が辞書で確認するよう指示する。
- (5) まとめとして、2回の練習で文章力の向上はなかなか実感できないので、後期の「発表法」でも継続して「書く」練習を重ねることを述べる。詳細は「発表法」の実践で紹介する。

4. 「発表法」の実践

4.1 事前調査

「文章作法」と同じように、実態に即した授業を展開するため、前期講評授業の折に「事前調査」を実施する。

4.1.1 調査の結果

調査対象は 59 名で、その内容と結果は以下である。なお、() 内は昨年の結果である。

- (1) あなたは高校時代に、人前で話す「話し方」を学びましたか。

ア 学んだ	6.8%	(0.0%)
イ 学ばない	59.3%	(85.9%)
ウ わからない	33.9%	(14.1%)
- (2) あなたは高校時代に、人前で自分の意見やレポートなどを発表したことがありますか。

ア ある	35.6%	(32.8%)
------	-------	---------

イ ない 45.8% (45.4%)

ウ わからない 18.6% (21.8%)

(3) (上記2のアを回答した人のみ)どんな場面でどんな話をしましたか。

《ここでは割愛する》

(4) あなたは人前で話す自信がありますか。

ア ある 0.0% (0.0%)

イ 少しある 0.0% (7.8%)

ウ あまりない 42.4% (42.2%)

エ ない 55.9% (48.4%)

オ わからない 1.7% (1.6%)

(5) あなたは人前で話す力をつけるために、身につけたいことや克服したいことがありましたら具体的に述べてください。(記述式のため、ここでは上位5点の人数を記す。)

○緊張しないこと 32名

○話す内容のまとめ方 26名

○わかりやすい伝え方 26名

○声の大きさや目線などのありかた 22名

○自信を持って話せること 7名

4.1.2 調査の解説と総括

以下は「事前調査」質問事項の背景と、指導の観点も含めそのまとめである。

(ア) 「高校時代」と限定したのは、「文章作法」の「事前調査」と同じである。学生の記憶がかなり鮮明であることや、実態を踏まえた授業が容易になるからである。なお、「人前」は「多数の人」と限定した。

(イ) 質問(1)で「話し方」を、「学んだ」が6.8%いた。調査を始めた平

成17年度から昨年度までは0%であったことを踏まえると、特筆に値する。調査では「学んだ」科目も記載することになっており、その内訳は「国語表現」である。高校で「話す」指導が遅まきながらも取り入れてきたことが伺えるが、まだ多数に至っていない。

(ウ) 質問(2)は、「人前で発表したことがない」が「わからない」を含めると、64.4%と前年とほぼ同じである。話す機会に恵まれなかった、または話すことに二の足を踏んだと推察される。授業ではこの実態を踏まえた指導が肝要になる。

(エ) 質問(3)「人前で話したことがある」と回答したその内訳は、生徒会や部活動においてが大半であった。他に、英語・社会・理科の授業、インターンシップ報告会、中学校の先輩としてなどが記載されていた。また、発表の回数は、2回が一番多く、次いで1回であった。

(オ) 質問(4)「人前で話す自信」である。質問(2)の結果から「発表」の経験者が昨年より若干多いにもかかわらず、全員が「自信のない」方に丸印をつけている。さらに、質問(1)で学んだ科目が「国語表現」であるにもかかわらず、「自信がない」に属している。いずれにせよ、実地の回数が不十分、知識として「学んだ」が実地までに至らなかった、または質問(5)のような「緊張した」・「うまくまとめられなかった」・「声が小さかった」などの反省があったためと解釈できる。これらを克服するには、「話す」場を多く設定し、場慣れをさせる指導を取り入れる必要がある。

(カ) 質問(5)の目的は、①授業「発表法」の目的意識を高め、②学生の実態を把握し、これに基づく授業内容を展開するためである。上記以外に「相手の心に残る話し方」、「原稿をあまり見ないで発表する力」、「正しい言葉遣い」などが書かれており、どの回答も「話す」指導にとって欠かすことのできないものであった。学生の回答に応えるため、「話す」は「話す内容」、「話し方(話す技法)」と「聞く」こ

とを個別的・一体的に指導することが最も重要であると再認識する。

4.2 指導の重点

「発表法」は「パブリックスピーキングの能力を高める」ことがねらいである。コミュニケーション能力の一つである「話す」は、「話す内容」と「話し方（話す技法）」が一体になると、「聞き手」の反応が高まる。このことを柱に、「事前調査」の結果や本学におけるこれまでの実践を踏まえ、指導の重点を次のように設けた。

- (1) 学習意欲を高め、「話す」と「聞く」の基礎基本の習熟を図る。
- (2) 「話し方（話す技法）」は実地に基づき体得させる。
- (3) 「話す内容」は「文章作法」の発展を図る。
- (4) 「話し言葉」と「書き言葉」の違いを理解させる。
- (5) 発表の場を可能な限り設ける。

4.3 指導の計画

「指導の重点」を踏まえ、「指導の計画」を次のように立てた。ここでは概観にとどめ、具体的内容は実践の項で述べる。

回	内 容
※	前期講評授業、オリエンテーション
1	1分間スピーチ①
2	1分間スピーチ②
3	1分間スピーチ③、3分間スピーチ①
4	3分間スピーチ②
5	3分間スピーチ③
6	3分以内スピーチ①
7	3分以内スピーチ②
8	3分以内スピーチ③、後期講評授業

4.3.0 オリエンテーション

「意見文を書く②」の作品を返却し講評を終えた後、「発表法」のオリエンテーションに入る。「指導の計画」の「1分間スピーチ①」の時間が本来のオリエンテーションである。このように繰り返して実施したのは、(a)昨年度まで発表練習は2回であったが、もう1回実施すれば発表力が著しく向上することを実感していたこと、(b)今年からオリエンテーションがクラス単位（昨年度まで2クラス合同）になったこと、(c)どのクラスも15名以内編成になり、やり繰り返すれば3回実施が可能になったことによる。

オリエンテーションの主な内容は次の通りある。

- (1) 夏季休業中の課題である「1分間スピーチ」の原稿を回収する。
これは来年度から本格的に始まる就職活動に向けて、添削を施し学生に活用してもらうためである。
- (2) 「事前調査」を行い、回収後にその活用について補足をする。
- (3) 『学生便覧』を用いて、「発表法」のねらい、授業計画、評価方法を説明する。授業計画の「1分間スピーチ」は「話し方(話す技法)」、「3分間スピーチ」は「話す内容」、「3分以内スピーチ」は「パブリックスピーキングのまとめ」を中心に展開する旨も加える。
- (4) 発表順を決める。
- (5) 各クラスの発表順1番（講評授業は2クラス合同）が発表し、授業展開の要領を熟知してもらう。詳細は「1分間スピーチ」の項で述べる。
- (6) 毎時間6名が発表することを予告する。

4.3.1 1分間スピーチ

第1回目の発表は「1分間スピーチ」である。「事前調査」質問(2)で「人前で話したことがある」は昨年より若干多く35.6%である。しかし、質

問(4)の「自信がある」は「少し」も含め皆無である。この実態から「1分間スピーチ」は学生にとって、時間的・内容的に抵抗が小さく取り組みやすく、人前で話す雰囲気や場に慣れさせることから実施した。また、「話し方（話す技法）」を指導する時間も確保できるからである。

テーマは「自己PR」である。このように設定した理由は、①自己を省察しそれを生かす態度を育成するとともに、社会人の資質として不可欠であること、②学生にとって取り組みやすいテーマであるとともに、これが次年度から始まる就職活動に生かすことができ学習意欲に結びつくこと、③自己の一部を表出することで、自己を確認するとともに自信を深めることにある。

次に授業展開の概観を説明する。これは、この後に実施する「3分間スピーチ」や「3分以内スピーチ」も同じ要領である。

展開は(a)「評価活動票」(《資料6》参照)を配付する。→(b)学生は発表者名、発表テーマ、評価者名を記載し準備する。→(c)教壇に立ち発表する。→(d)評価活動に入る。この間に指導者は発表に要した時間を板書する。→(e)発表者は感想を述べる。→(f)聞き手が発表の感想を述べる。→(g)指導者は助言とまとめをする→(h)評価活動票は発表者へ集約し、次回に指導者へ返却する。

以上が展開の流れであるが、その内容は以下である。

- (1) 「評価活動」を行う根拠は、①《資料6》の「5」にもあるように、「話す」ポイント10項目の体験的習得、②「聞き手」の反応から、「話す側」の客観的立場による改善、③「聞き手」の積極的な学習態度の育成、④要点を短時間にまとめる要約力の養成のためである。
- (2) 「発表者」は原稿そのものを可能な限り見ないで、「聞き手」を見て話すように指導する。声に表情が表れ、生き生きとしたコミュニケーションそのものになるからである。そのため、レジюме作成の仕方も同時に指導する。

《資料 6》

(「発表法」教材)

スピーチ評価活動票

1 発表日時 平成 年 月 日 時限

2 発表者名 []

3 発表テーマ []

4 評価者名 《 》

5 評価の観点

- | | A | B | C | D | E |
|-----------------------|---|---|---|---|---|
| ① 出だしてひきつけられたか。 | | | | | |
| ② 話題がテーマと合っているか。 | | | | | |
| ③ 全体の構成を考えて話していたか。 | | | | | |
| ④ 言いたいことが明確に伝わったか。 | | | | | |
| ⑤ 魅力的な内容であったか。 | | | | | |
| ⑥ 言葉遣いが適切であったか。 | | | | | |
| ⑦ 声量・速度・抑揚・間は適切であったか。 | | | | | |
| ⑧ 動作や視線が適切であったか。 | | | | | |
| ⑨ 時間配分は適切であったか。 | | | | | |
| ⑩ 意欲や熱意が感じられたか。 | | | | | |

6 全体の感想（発表者も記す）

- (3) 「発表に要した時間」は、字数と合わせて板書する。大多数の学生は自己の話す速さを承知していない。個人差はあるが、スピード感覚や聞きやすい速さを体得させるために行う。
- (4) 「発表者の感想」は「話す内容」と「話し方」を客観的に見直す態度の育成である。「聞き手の感想」は自分が発表するときに生かすためである。そのため、「聞き手」は「話す内容」や「話し方」も含め、参考になったことや、改善すべき事柄をそれぞれ一点以上述べることになっている（《資料7》参照）。その折、起立してクラス全員に聞こえる音量で発表することにした。同時に、要点を的確に捉え、要約する力を育てるねらいもある。
- (5) 「指導者は助言とまとめ」は時間的制約から、前半3名、後半3名が終わった時点で行う。「事前調査」、「発表者の感想」、「聞き手の感想」の3点を踏まえているため、「助言とまとめ」の内容はクラスで異なる。「話す」基礎基本の徹底と指導の重複を避けるため、指導チェック表に基づき整理している。また、「人前での発表」に自信を持たせるため、できるだけ褒め、改善点とその工夫は1～2点にしている。

次に「話し方」の助言例を3点紹介する。「緊張したため早口になった」ことに対する助言は、「多くの人は人前に立つと緊張します。はじめに発声する名前、『ただいまから自己PRをはじめます』は、意識的に少し大きめの声でゆっくり話し出すと、多少落ち着き早口にならないですみます。」、「目のやり場に困った」は「視線は基本的に中央に合わせます。時々左右にも目配りができたら立派です。皆に聞いてもらう気持ちが表れるからです。」、「教壇に立った瞬間、最初の言葉を思い出せず焦った」に対して「年配者でも緊張のあまり、言い出しの言葉や、次に何を話すのか思い出せないことがあります。レジュメを持参し、何を話すか確認すると良いでしょう。確認する

《資料7》

題	自己 PR	教養学科（4 A）
		氏 名 A・T
<p>私は気が利く性格です。飲食店でアルバイトをしていたとき、通常の出勤時間よりも15分早くアルバイト先へ行き、テーブルが汚れていないか、調味料や箸が少なくなっていないかを確認し、そのつど掃除をしたり、補充をしたりしていました。日常生活でも風邪を引いて辛そうな人にポケットティッシュを手渡したり、また授業を休んだ友人にプリントをコピーし渡していました。しかし、友人におせっかいと言われ、相手や場によっては行動を控える必要があることを学びました。それ以来、より相手の身になって考え、より周囲を観察して行動するようになりましたが、これからも、いろいろな場面で、この気が利く持ち味を生かしていくつもりです。</p>		

(発表者の感想)

<p>人前に出ると凄く緊張して上がってしまうので、途中で内容がとんでしまい、つかかからずに話すことができませんでした。声も震えて視線も泳いでしまいました。少しでも改善していきたいと思います。</p>

(聞き手の感想)

<p>自分が経験したことを元に自分のいいところがアピールできていたと思う。</p>
<p>途中でつまっていたけれど、紙を見ることなく最後まで言えていてよかった。</p>
<p>話すスピードが少し速かった気がするから、もう少しゆっくりしたらいいと思う。</p>

(聞き手の感想)

<p>体験談をふまえて文章を構成していていいと思った。</p>
<p>又、どのように将来につなげたいか述べていていいと思った。</p>
<p>声のトーンがずっと同じで、単々と話しているように感じたので抑揚をつけた方がいいと思った。</p>

ことはマイナスにはなりません。トンチンカンな話になるより数段よろしいです。」などである。「話す内容」は、(8)で述べる。

- (6) 時間的制約と効果的授業の展開から発表は毎回6名とし、「聞き手の感想」は発表者一人につき2名としている。「評価活動票を発表者へ集約」は、①発表者は「聞き手」全員の感想を謙虚に受け止め、それを参考に次回に生かすこと、②「聞き手」には責任ある執筆態度の育成と、自己の発表に生かすポイントの習得、③「話し手」と「聞き手」において、文字を媒介した相互交通を通して、コミュニケーションの意義を深めることにある。上記(4)と同じ目的であるが、発表者はより冷静に自己を省みることができる。
- (7) 「1分間スピーチ」は「人前で話す」ことに慣れさせることと、「話し方(話す技法)」の基礎基本の習熟に力点を置いている。後者については、「評価活動票」の「5」は「話し方」のポイントだけ記しているため、例えば「声の大きさ」や「抑揚」はどうあるべきか、具体的に説明をするように心がけている。これは「事前調査」の回答に応えることにも繋がるからである。
- (8) 「自己PR」の事前における留意点である。課題提示の折(「文章作法」の「意見文を書く②」の授業)に、①場面は複数の面接官に向かって話す、②1分間の字数は、個人差があるが、300~350字ぐらいである、③表現は敬体で言葉遣いに配慮する、④原稿は添削し返却する旨を説明してある。その内容の特徴的なものと指導は以下である。
- (ア) 例年は出身校・趣味・所属部活など、いわゆる自己紹介型の内容が目についたが、今年度は全く姿を消した。その意味では、「自己PR」の意味を理解していると言える。また、高校での指導が行き届いているとも言える。
- (イ) 構成は頭括型と尾括型のいずれかでまとめていたのが半数以上

を占めていた。しかし、残りは、①長所の羅列に終始、②短所の改善が中心、③PRの裏づけが薄弱、④まとめ方が不十分などであった。そのため、①については分量から内容が抽象的になりPRとしては薄弱なものになる。また、長所と短所は表裏の関係にあるので、長所は1～2点に絞ると効果的である。②では、自己弁護に成りがちになる。ここでは自己の特性をアピールするもので、自己肯定であることを再確認する。③と④では「文章作法」の復習をする。根拠が明らかでないと相手の心に響かないことや、「おわり」は主題文(最もPRするもの)でまとめることなどを助言する。特に長所を複数挙げた場合、それが一本化することも添える。

4.3.2 3分間スピーチ

「3分間スピーチ」の課題は「日常の生活または社会の風潮や出来事で最も関心のある事柄を取り上げ、あなたの考えを1,000字以内で述べよ。」である。「意見文を書く①」と「意見文を書く②」を合わせたものであるが、条件は異なる題材を取り上げることになっている。これは自己の意見を人前で発表するための課題であるが、同時に「文章作法」の「意見文を書く③」にも当たる。授業展開は「1分間スピーチ」と同じ要領なので、ここでは「話し方」と「話す内容」に分けて実態を報告する。

(1) 話し方

「1分間スピーチ」のときは、約8割の学生が原稿を見ない、または見ても確認するぐらいであった。しかし、「3分間スピーチ」になると逆転する。初回はレジュメ型またはレジュメと原稿とを両方用意する折衷型が約2割で、他は原稿に頼る依存型であった。

これにより、発表する側は①「1分間スピーチ」の場合、暗記で対応していたが、「3分間スピーチ」になるとそれでは対応できず、原稿通りに一字一句間違わず話すことは不可能であること、②話す内容や

流れを自分のものにしておかないと、原稿に依存し早口になること、③レジュメをしっかりと作り、練習が必要であることを学ぶ。

聞き手は①原稿依存であれば、早口になる上、抑揚や間（ま）が少なく、「話す」熱意が不足すること、②レジュメ型や折衷型はこれらが大幅に改善され、声に表情が表れ惹きつけられることを学ぶ。そのため、後半の「3分間スピーチ③」になると、レジュメ型が増えた。

指導助言としては、①「1分間スピーチ」で説明した「話し方」の反復指導、②統計の数字や年代等は、正確を期すためメモを見て確認しながら話すことは一般的であること、③日本語の特性である同音異義語の話し方、④難語や流行語の話し方、⑤問いかけの効果など、「話す側」の内容に応じて助言する。

(2) 話す内容

先にも述べたが、これは「発表法」と合わせて「文章作法」の継続でもある。「意見文を書く①」・「意見文を書く②」は、個人添削を施し作品を返却していたが、今回はクラス全員の作品を印刷し事前に配布をする。当初は学生の質問を受けて、それに回答する予定であったが、90分間で授業を終えなければならない制約から講義調にならざるを得なかった。前半と後半の2回にわたって、主題・構成・表現のあり方やタイトルの適否を中心に公開的な指導を行う。その折、良くできている点は褒め、改善すべき点はどのようにすべきかを明らかにしながら説明をする。各クラス15編の作品を取り上げ指導したためか、次に実施した「3分以内スピーチ」の作品では、添削箇所が激減した。

与えた課題は広範にわたるが、話し手（書き手）は主題を自ら選定するとともに、多様なテーマで述べているため、聞き手は退屈することがなかった。「聞き手」の感想には、①このような事柄に関心を抱いていることに驚いた、②このような考え方があることを改めて知った、③データや歴史などよく調べている、④このような表現の仕方が

あるのかなど、新たな発見や知識を得たことが多く書かれてあった。

なお、作品は「意見文を書く①」・「意見文を書く②」を踏まえながら添削し、発表後に返却する。

4.3.3 3分以内スピーチ

このスピーチは、「発表法」および「文章作法」の総集編に当たる。提出した課題は「私の主張」である。このように設定した理由は、コミュニケーションにおける自己表現の方法として最も相応しいためである。

事前の指導事項は、①何を主張するか、各自がサブタイトルを設けること、②場は不特定多数の「人前」での発表であること、③3分以内で終了する分量であること、④主張が「聞き手」にとってわかりやすく納得できるものであること、⑤可能な限りレジュメによる発表であることの5点である。

最初に「話し方（話す技法）」である。①「3分間スピーチ」とは打って変わって、「1分間スピーチ」とほぼ同じように、約9割の学生がレジュメ型、またはレジュメと生原稿の両方準備する折衷型であった。②そのため、顔を聞き手に向け、聞き手の反応を確かめながらのスピーチであった。③話すスピード、声の大きさ、姿勢は概ね適切であった。④一語一語を丁寧に発するため、イントネーションがいままでよりも顕在化し、落ち着いた話し振りであった。⑤発表者はこれまでの反省にたち、意欲的に練習をしてきたことが伺えた。これらは、「1分間スピーチ」と「3分間スピーチ」を通して、発表者は感想発表も含め4回、聞き手の場合は少なくとも6回、起立してクラス全員に聞こえる声で発表してきた結果による。

次に「話す内容」（《資料8参照》）である。①先にも述べたが添削箇所が激減したことである。②4名の学生は、サブタイトルに工夫を凝らす必要があったが、他の作品は、サブタイトルと内容が合致していた。③

《資料 8》

題	私的主張～「学びたい」と言える社会へ～	教養学科〔4B〕クラス	学生番号 氏名 Y・A
	皆さんは、奨学金を利用してはいるでしょうか。私は現在一人暮らしをしていますが、生活費は全て奨学金で賄っています。もし、今奨学金を止められると、学校へ通		
	一口に奨学金と言っても、給付型、貸与型、利息の有無など様々な種類があります。私が借りているのは、		
	日本学生支援機構の「利息付き貸与型」です。学校を卒業し就職すれば、すぐに返金を始めなければいけません。		200
	私は高校生のとき、進路のことで何度も母とケンカをしまして。あの就職か進学か、地元に残るか出るとかを何度も話をしました。地元を出て進学するから進学です。私は何度も母に「		
	将来お金を返すのはあんたなんだよ！」と言われました。結局、母が道内なら、ということまで許してくれました。今短大に通うことができている。それまでに何度も奨		400
	学金の案内のパンフレットを読みながら、「学ぶためになぜこんなにお金が必要なんだろう」と悩みました。高校四年制は無理だからと短大や専門学校で妥協したという		
	人は少なくありません。		
	日本学生支援機構が平成22年に調査した、奨学金を受		
	けている割合のデータがあります。大学昼間部だと50.		
	7%、修士課程で59.5%、博士課程で65.5%と		600
	いう結果が出ていて、この数字は年々増え続けています。大学の半分以上は、奨学金を借りなければ金銭的に就		
	この困難な状況にあると、私には一つ疑問に思うことがあります。それは、奨学金に利息が生じるものがあること		
	とです。日本学生支援機構には有利子と無利子のものがあります。無利子の奨学金の採用率は低いですが、利息		
	がつけば、借りた額以上のお金を返さなければいけません。これに本当に「奨学金」と呼べるのでしょうか。教		800
	育ローン、借金を何ら変わりありません。学びたいと思		
	ったとき、借金をしなけければいけません。政府は何		
	度も「教育に力を注ぎます」と言っているが、一向に		
	現状に批判のある奨学金のスタイルが変わる気配はあり		
	ません。お金のせいで「学びたい」という意欲を潰す世		
	の中であってはならないと思えます。これから進学す		
	る子どもたちのためにも、早急に奨学金制度の見直しを		
	するべきだと私は考えます。		

(発表者の感想)

発表者：Y・A
記憶が飛んでしまったとき、レジュメも読み飛ばしてしまって上手く活用できなかった。
また、文章自体も最後の方に自分なりの解決策などを組み入れるべきだったなと思った。

(聞き手の感想)

発表者：Y・Aさん
自分のことを軸として、根拠付けて論じていたので、とてもわかりやすかったです。
自分の考えを述べると共に、正確なデータなども一緒にのべていたのでより理解を深めることができました。
原稿もほとんど覚えていたので良かったと思います。
改善点としては、もう少し明るく声を張ったらいとおもいます!!

(聞き手の感想)

発表者：Y・Aさん
自分にとっても身近に感じるテーマだったので、聞き入ってしまいました。
データも述べられていたし、私達の気持ちをそのまま伝えてくれていて、説得力があると感じました。顔も上がっていたし、大きなはっきりとした発音だったので、聞きとりやすかったです。少し早口だったかなという印象があります。

(聞き手の感想)

発表者：Y・Aさん
データが何年度といったように数字も詳しく書かれていて内容が明確でした。自分が奨学金をかりているなど自分の経験を題材としてとり入れたのも良かったと思います。原稿もあまり見ていなかったのが良かったです。改善点としては少し早口に感じました。時間的にもまだ余裕があるのでゆっくり話すより聞きやすいスピーチになると思います。

また、「はじめ」・「なか」・「おわり」の段落構成が明確になり、より論理的な文章になる。④一部に表現が不十分な作品もあったが、それも多くて2箇所ぐらいであった。これは「1分間スピーチ」や「3分間スピーチ」で、「話し手」や「聞き手」が感想を述べるために、ポイントを捉え簡潔にまとめる作業36回の所産といえる。⑤多くの学生は、850字前後でまとめてきた。「3分以内」であれば、どのくらいの分量が適切か、「1分間スピーチ」や「3分間スピーチ」から、話すスピード感覚を体得したといえる。

「聞き手」は①「発表者の主張」が、例えば、「音楽の力」・「ライラック学生会に入って」・「小学生の化粧」・「日本の食料廃棄」・「小中学生における携帯電話」など、話題がそれぞれ異なるので、新鮮な思いで聞く。②「3分間スピーチ」は事前に発表者の原稿を配布したが、今回はそれをしなかった。パブリックコミュニケーションの場を演出するためである。そのため、「聞き手」は顔を上げ発表に集中する。そうしなければ聞き手としての感想を述べることができなくなるためもある。

以上のことから、「話し手」は「話し方」と「話す内容」の一体化が進むとともに、「話し手」と「聞き手」の間には、一種の緊張した雰囲気は漂い、学習効果が高いものであった。

なお、「指導者の助言」は、発表者一人ひとりに何がすばらしかったかを中心に述べるとともに、「発表法」と「文章作法」の基礎基本と、両者の「事前調査」を踏まえながらまとめる。

昨年度まで、もう1回発表する場を設ければ、「発表力」や「文章力」が格段に向上するという予感が的中した。本学は礼儀正しさと真面目さが伝統的な学風である。その証拠の一つとして、無断で欠席する学生は皆無に等しい。そのため、基礎基本を踏まえながら系統的な指導と個別的な指導を重ねると、習熟度が高く、その効果は具現化される。その上、

年齢的にも吸収力や適応力もあるのでそれが倍化された。

入学して最初の出会であるオリエンテーションで、「文章力をつけるには、隔週実施の授業のため少なくとも半年、普通は1年を要する」と話したが、学生自身は「私の主張」における感想発表から、「話す力」とともに「書く力」が数段身に付いたことを実感していることがうかがわれる。本学では学期末に学生を対象にした「授業アンケート」を実施している。「発表法」は12月末に行われたが、その中の設問4「総合的に判断して、この授業は満足できるものでしたか」では、「そう思う」が42名(72.4%)、「どちらかといえば思う」13名(22.4%)、「どちらともいえない」3名(5.2%)、「どちらかといえば思わない」や「そう思わない」はそれぞれ0名であった(休学が1名)。

なお《資料8》の「発表者の感想」および「聞き手の感想」の用紙は、「活動評価票」と異なりメモとして利用してもらったものである。

5. おわりに

昭和41年春に大学を卒業し、美唄市の高校に国語教師として赴任する。学習指導要領「国語」に4領域1事項、つまり「話す」・「聞く」・「読む」・「書く」に「言語事項」が明示されている。この中で、指導に最も不安を抱いたのは「書く」であった。これまでの学校教育で学習した記憶が全くないからである。大学の卒業論文は先輩諸氏の書物を参考にしてまとめたにすぎない。学校や市の図書館には「つづり方」関係の書物はあったが、構成や表現のあり方などを記した参考文献を見つけることができなかった。そのため「書く」指導はこのときから試行錯誤の繰り返しであった。

旭川市、岩見沢市と異動するたびに、作文教育に造詣の深い同僚に恵まれ、そのお蔭で昭和59年1月に開催された北海道高等学校教育研究会に「実態に即した文章表現の指導～国語Ⅰを中心に」と題して実践を発

表する。この後、月間教育雑誌『高校教育展望』（小学館）に連載、『高等学校国語科 新しい授業の工夫 20 選』（文部省初等中等教育局視学官大平浩哉編著、大修館書店）に掲載される。「話す」指導は留萌市に異動してから本格的に取り組み、その一部を「意見交換を中心とした課題解決的学習の実践」と題し『留萌教育推進のために』（北海道教育庁留萌教育局）に発表する。

高校定年後、北海道武蔵女子短期大学で再び「書く」と「話す」指導を担当することになり、不思議な「縁」に内心驚いている。高校教員時代も含め、教員生活 47 年の区切りとして、「文章作法（書く）」と「発表法（話す）」の実践をまとめてみた。参考になれば幸甚に尽きる。